

〈活動報告〉

「まちの保健室」活動の4年間の評価の試み —SWOT分析実施報告—

鳥取看護大学 地域貢献委員会¹

Regional Contribution Committee : Evaluation Report with SWOT Analysis of 'Local Health Room' Activities

鳥取看護大学の開学から4年間、教職員が中心となり継続的に行ってきた社会貢献活動「まちの保健室」の活動の評価を、地域貢献委員会の勉強会にて実施した。4年間の振り返り、教職員で課題と今後の戦略について話し合いを行った結果を表にまとめた。ボランティア等と連携・協働しながら、地域のニーズに応じた内容の「まちの保健室」にしていくことが、今後の活動の方向性として共有できた。楽しくやりがいのある活動が継続できるよう、地域貢献委員会はこれからも企画・運営の下支えをしていきたい。

キーワード：社会貢献 地域 まちの保健室 SWOT分析

はじめに

鳥取看護大学では、大学設置準備の頃から「まちの保健室」という活動を全学的に実施してきている。「まちの保健室」とは、地域の中のホッとする「居場所」となることを目指して、鳥取看護大学の教職員と学生が地域のボランティア等と共に取り組む社会貢献活動である。血圧や体脂肪、骨密度測定等の各種健康チェックと、健康相談、健康ミニ講話の実施が主な活動内容である。「まちの保健室」の活動は、約4年間の中で内容を充実させながら鳥取県全域に活動の場を拡大してきた。完成年次にむけて徐々に学内業務が忙しさを増す中においても、変わらず活動を継続してこられたのは、地域からの多くの励ましと教職員の惜しみない協力で支えられたからこそのものである。

4年間という大学の一つの節目を迎えるにあたり、地域貢献委員会では、全学的な取り組みである

「まちの保健室」を一度全体で評価し、そこから見えてきた課題をもとに、今後の方策を考える機会を設けることとした。そこで、活動の強みと弱みを見える化して共有し、客観的に「戦略」を検討するために、SWOT分析^{注1)}の枠組みを用いた勉強会を開催した。開催日時等は、表1の通りである。これは、社会貢献活動の評価を、SWOT分析をツールに活用しながらグループワーク形式で行う一つの試みであった(表2、表3)。

1. SWOT分析 グループワークの実施

表1の勉強会の開催に先立ち、「まちの保健室」

表1 2018年度 地域貢献委員会勉強会 開催実績

日 時：2019年3月11日(月)
3限目 13:00~14:30
場 所：鳥取看護大学 K409会議室
テーマ：わたしたちの「まち保」のカタチ 戦略会議
内 容：「まちの保健室」SWOT分析に基づく グループワーク
参加者：鳥取看護大学 教職員26名

1 鳥取看護大学

の企画・運営に携わってきた地域貢献委員会の委員のみで「まちの保健室SWOT分析」を実施した(2018年12月)¹⁾。その時の分析結果を勉強会参加者に予め提示することで情報を共有し、グループディスカッションの土台とした。そして、勉強会を通して全体で分析の追加修正を行う形式とした。5～6名で1つのグループをつくり、4グループに分かれて行った。委員をファシリテーターに据えて進行し、次年度の活動戦略についても全体から意見を出してもらった。限られた時間であったが、和やかな雰囲気の中で活発に意見が交わされるグループワークとなった。開催時期の設定には反省点を残したものの、事後アンケートでは参加者の96%より「満足」「まあまあ満足」の反応が得られており、概ね良い結果で終了することができたと考える。

2. 課題と戦略の特徴

表2には教職員が認識している現在の「まちの保健室」についての現状と課題が、表3には今後の活動に向けての戦略や期待が見える化された。この結果を概観し、全体で共有した「まちの保健室」の課題と戦略の特徴について、若干の解説と考察を付け加えておきたい。

(1) ボランティア育成の継続、効果的な連携・協働

課題として多く聞かれたことの一つは、マンパワーの問題であった。「まちの保健室」の開催回数が年々増えていくことに対し、4年目で全学年が揃ったことに伴う教員の学内業務の過密が、活動参加への疲弊感をもたらした。一方で、COC+事業の一環で地域の健康づくりリーダー「まめんなかえ師範」^{注2)}の養成講座を定期的に行っており、すでに100名を超える修了生を輩出している。このボランティアが、積極的かつ主体的に「まちの保健室」の運営に参画されているお陰で、今日の「まちの保健室」が質・量ともに維持できている部分大きい。すなわち、ボランティア育成の継続は、今後の課題

解決の一つの鍵でもある。

現段階では、「まめんなかえ師範」の個々の特技や個性を発揮してもらう機会がほとんどない場合が多いが、実は多様な職歴や経験、資格や技能を備えた方が多い。今後は、ボランティア個々の特性も発揮していただきながら、適材適所の有機的な連携・協働ができるとよいのではないだろうか。さらに、「まめんなかえ師範」や地域の方が企画・運営の主導権を持つような「まちの保健室」となっていくことで(特に、準拠点型^{注3)})、マンパワーの課題に対しても、また地域に密着した活動としても、より効果的になると考える。

今後の戦略として、ボランティアの層を厚くしていくことと、その活躍の場や活動内容に拡がりを持たせていくこと、「まちの保健室」活動の主体を分かち合うような効果的な連携・協働をしていくことが重要であることが共有できた。

(2) 地域のニーズに応じた柔軟な活動内容の検討

地域のニーズをふまえた内容の活動とするためにはどうすれば良いか、という視点でも、戦略がいくつか検討された。「まちの保健室」では、測定項目が充実してきた反面、運営側が作業に追われてしまうために、健康相談に十分な時間を割けないジレンマがある。馴染んできた開催地では、健康相談でゆっくりと話したい地域住民のニーズを感じることもある。参加者の「話したい」「相談したい」思いに応えるためには、定形的な測定項目の全てを必ずしも毎回行う必要がないのかもしれない。地域の健康課題に対しても、地区担当の保健師等と予め情報共有をしておけば、協働的に地域へ働きかけたり、ポイントを絞った活動内容に調整していくことができるのではないかと。さらに、当該地域の「まめんなかえ師範」の参画があれば、より地域のニーズを汲み取りやすくなるものと考えられる。当該地域の潜在ナースに協力してもらうことも、地域とのつながりを深める機会にもなり、効果的かもしれない。予め、地区担当の保健師や住民の協力を得て、地域人材の発掘

表2 「まちの保健室」SWOT分析

	ポジティブ	ネガティブ
内部環境	<p>〈強み〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内で予算化されている。 ・「まちの保健室」を通して、大学の認知度が上がっている。 ・「まちの保健室」の名称を通して、健康意識の啓発に繋がっている。 ・災害中長期の地域支援に即戦力をもって貢献できる。 ・学生の教育の場になっている。(段階的な教育プログラム: Hidden Curriculum) ・学生を巻き込んだ地域貢献活動が出来る。 ・教員の力量形成の場になっている。(一般に向けて分かりやすく伝える力など) ・全学体制で取り組んでいる。 ・学習会を開催するなどし、改善案を検討している。 ・教員が運営に慣れた。 ・拠点型ではリピーターが多い。 ・拠点型がサロン化してきた。 ・子育てなど、対象の拡がりがある。 ・グローバルにも対応できる。 ・ミニ講話は多彩に展開できる。 ・まめんなかえ師範のラダー制度が2018年から発足している。 ・利用者さん主体で運営を考えられたり、物品を購入されたりしている。 ・地域全体を網羅できる「小さな拠点」づくりを推進できる。 ・連携のあり方について模索することができる。 ・人財養成に尽力できる。(教育機関としての強み) ・気楽に地域と関われる。 ・看護師としてのやりがいを感じることができる。 	<p>〈弱み〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員・学生のボランティア意識にばらつきがある。 ・試験前などで「まちの保健室」に授業レポートのため参加する学生には、負担感が生じている。 ・教員が実習指導や講義で忙しい。 ・教員のマンパワーの不足がある。 ・教員が疲弊している。 ・測定機器の導入など新たな取り組みが多く複雑化しているため、これらをどう活用し健康相談に繋げるとよいか。 ・専門職の確保が難しい。 ・イベント型の回数が増えている。 ・各活動類型の将来ビジョンが曖昧である。 ・現地までの移動や学生の同乗にかかる教員の不安感がある。 ・目標が不明瞭である。 ・学生にとっては、義務感で出ている側面もあるため(自発的なボランティア参加とは言い難い場合がある)、行きやすい地域に希望が集中したり、参加しない学生も出ている。
外部環境	<p>〈機会〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「まちの保健室」の認知度が上がった。 ・中部地区において、「まちの保健室」が浸透してきた。 ・鳥取県内の活動機会が増加した。 ・地域からのニーズがある。 ・地域(行政・住民)から期待されている。 ・健康寿命の延伸は健康づくり施策の柱であり、「まちの保健室」はその具体的な対応策の一つとして注目されている。 ・リピーターの参加者が多くなった。 ・行政(主に倉吉市)との連携がある。(毎月1回の「まちの保健室」事業推進連絡会) ・自治体(倉吉市)の総合計画に組み込まれている。 ・外部予算を獲得できている。 ・まめんなかえ師範の人数が増えた。 ・協働するボランティアが主体性を発揮できるようになってきた。 ・専門職集団の意識が変わってきた。 ・外部・専門職の力量形成の場となっている。 ・受験生の志望動機になっており、若者の興味も引いている。 ・外部組織(県看護協会、郵便局等)との連携の機会がある。 ・看護大の教員は、健康づくりにおける学識経験者として存在感を増しつつあり、自治体の委員会等を含む各所で発信する機会が多くあることが、認知度アップにつながり、財源確保にもつながっている。 ・倉吉市全13地区にまめんなかえ師範が誕生する予定である。 ・地域住民の心身の健康に役立つ活動である。 	<p>〈脅威〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予算の継続性(財源確保)の問題がある。 ・測定内容のマンネリ化がある。 ・専門職集団との協働体制がまだ未成熟と言えるため、運営が大学側に偏りがちである。 ・利用者が固定的になってきている。(新しい層への働きかけが不足している) ・東部・西部での活動が少なく、東部・西部における「まちの保健室」の知名度はまだ低い。 ・まめんなかえ師範が増えてきたが、活動へ参加する方は一部にとどまっている。 ・新しいまめんなかえ師範が活動に参加しにくい。 ・まめんなかえ師範の安定的な参加を今後も継続的に期待できるのか。 ・準拠点型の開催が年間1回(倉吉市13地区)となってしまう。 ・有資格者ボランティアの数が少ない。 ・まちの保健室の会場へ行く移動手段がない人がいる。 ・関金地区でも開催していることがまだ十分知られていない。

表3 今後の戦略

<p>戦略①</p> <p>【強み×機会】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・季節のイベント時期に合わせて、活動内容やミニ講話のテーマを設定していく。(9月 防災, 5月12日 看護の日, 11月11日 いい介護の日等) ・ミニ講話の中身を、様々な部門とコラボレーションして変化を持たせる(多様性のある開催内容にする)。例えば、本学学生、短期大学の教員・学生、こども園の園児、地域包括支援センター、中学生、高校生、農業大学校等) ・地域におけるチーム医療・予防効果・学習の場としての活動のねらいを協働する者同士で共有することを強化していく。 ・「健康」をテーマとした大学生と中学生の交流の場をつくる(意見交換や活動した結果の発表会も実施してもよいのではないか)。 ・子育て支援型に中学生を参加させることで、乳幼児と触れ合う機会を通して、命について考える学びの場にできる可能性がある。 ・「まちの保健室」に関して、常に測定項目をもって開催するものだという概念を見直し、住民にとって有益性を実感してもらえるような活動となるよう、中身を地域のニーズに合わせて調整していく。 ・ラダーを取り入れ、まめんなかえ師範とともに倉吉市13地区の活性化を図っていく。 ・ラダー制度の効果を検証していく。 ・じっくりと健康相談に対応する時間を取るためにも、様々な測定機器を用いなくて開催できる「まちの保健室」の形を検討する。(測定が目的になってしまうと、「まちの保健室」の本来の目的からそれてしまう)
<p>戦略②</p> <p>【弱み×機会】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自治体の健康づくり推進担当部署や地域の健康づくり推進員等との連携を取って、地域内の主体的な活動に発展するよう促していく方法を検討する。 ・地区公民館の予算の中に、「まちの保健室」活動が組み込まれるとよいのではないか。これを提案し、予算を獲得できるようにしていく。 ・人員の協働のあり方や地域の支援システムを構築する。 ・地域住民の健康に繋がることや、学生への教育的効果というような点から、活動の目的を明確にしていく。 ・卒業生ボランティアを設けて活用する。(人材バンクを作り、ラダー制度やポイント制も導入してもよいのではないか) ・補助金を得ていることで、「まちの保健室」が実施しなくてはならないものになっている側面があるため、教員の主体性が削がれている可能性がある。補助金がなくても運営できる形にシフトしていくことで、主体的な活動になる。 ・授業による学生の参加であるが、学生がもっと主体的に実施する活動にしていく。
<p>戦略③</p> <p>【強み×脅威】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥取県や倉吉市からの予算獲得できるよう、継続的に働きかけていく必要がある。 ・まめんなかえ師範全体での交流機会を後方的に支援し、ブランクがあっても参加しやすい雰囲気づくりとなるよう働きかけていく。 ・まめんなかえ師範の活動評価をして、客観的視点で活動参加の意義や可能性を示し、モチベーション維持に繋げていく。 ・あきらめずに「まちの保健室」のPRをしていく。(口コミが一番効果的) ・研究として活動の効果を伝えていく。(プロジェクトとして、スケールを作成して等) ・その人が何を求めて(目的・動機)まめんなかえ師範になろうと思ったのかを確認していく。(地域のため、自分の健康のため、受講が目的等) ・まめんなかえ師範塾の受講目的や動機には温度差があるため、受講後の意識調査をする必要がある。 ・まめんなかえ師範に各々の特技などに応じて役割を持ってもらい(企画、広報、模擬患者養成等)、積極的に参加してもらえるよう、「まちの保健室」以外にも活動の場を提供していく。(もともと、「まちの保健室」のみでの活動を条件にしていない)
<p>戦略④</p> <p>【弱み×脅威】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「まちの保健室」の開催回数や場所を精査して、イベント型や出前型の開催を見直すことと、開催地域をある程度限定して定期開催していくこと(準拠点型)に重点を置き、特に中部での準拠点型の開催回数を増やしていくことを検討する。 ・地域のニーズに合わせた実施内容にする必要があるため、柔軟な内容の「まちの保健室」で対応できるようにする。 ・片付けや準備作業に取られる時間の短縮を図る目的で、作業の簡略化を検討する必要がある。(各項目の持ち出し物品の箱、物品チェックリストを分けて、現地で準備・片付けを担う各担当者が責任を持って片付けまで管理するようにする。それにより、各項目を担当するボランティア等の主体性のある活動にも繋がられるのではないか) ・地域の有資格者等の人的資源の掘り起こしをする(病院退職者などに期待)。 ・自立的に運営される「まちの保健室」を育成し、その後方支援をしていく。 ・西部の活動は、鳥取大学と連携・分担して実施する。(目的は同じなので協力できるのではないか。組織による特徴も出て面白いのではないか) ・まめんなかえ師範が共通で参加できるよう、県にボランティアの人材バンクができるとよいのではないか。 ・潜在ナースに血圧測定役割で参加してもらおうようにしていくと、地域とのつながりを深める機会にもなる。(看護師の人材バンクにお願いし、連携していく) ・まめんなかえ師範に卒業生が加わるようにすることで、年齢層も広がり、新しい人が風土的に入りにくいボランティアの状況も少し変化が生まれるのではないか。

をすることも、地域のニーズに応じた活動としていくための手立てである。

このように、地域の特性やニーズに応じた柔軟性のある活動内容へ調整していくことで、質や満足度の向上に繋がるだけでなく、マンパワーの課題解決にもきつと良い効果をもたらすに違いない。それに加えて、人々にとって‘いちげんさん’的な活動になりがちである。単発のイベント出展や不特定多数を対象とした活動形態のものについては（イベント型^{注3)}）、そろそろ目的に照らして中身を精査し、地域づくりに繋がると思われる「まちの保健室」活動に集約していくことも、考えていくべきこれからの方向性である。地域のニーズに応じた活動にしていく目的意識の共有により、開催頻度に評価の視点を置き過ぎず、地域との連携のもとに質の向上を求めていくものへ、徐々に整理されていくことを期待する。

（3）皆が楽しみながら参加できる、やりがいのある「まちの保健室」に！

開学から4年間、「まちの保健室」を手広く展開してきた中で、その活動目的やねらい、将来ビジョン等を確認合い共有する機会が果たして十分に持っていたのだろうか。これに関しては、これまでそれぞれの役割意識に任せて突き進んできた部分があり、曖昧さが否めないのは委員会としての課題であったと振り返る。

今回のような、活動の課題と戦略についてもそうであるが、問題意識や今後の目的・ビジョンを共通認識していればこそ、連携・協働が効果的に進むと考える。目的やビジョンの明確化をしていくこと、これを教職員だけでなく、参画するボランティアや学生とも共有していくことが、大きな推進力や発展性を生むと思われる。「まちの保健室」は、勉強会のテーマとしたように、これに参画する‘わたしたち’全員の活動である。携わっている者全体で意見交換や今後についての目的共有をする取り組みが、これからも継続的に必要であると考ええる。

活動の中で、目的に向かいどのよう

に自分自身が役立っているかを感じられることや、個々の意見や改善案を互いに受容していけるフラットな関係性の保持が、これまでと同様に今後も非常に大切な点であると考ええる。ボランティアや学生、教職員のだけれども、地域住民との交流を積極的に楽しみつつ、それぞれの役割を果たす中でやりがいを感じられる「まちの保健室」となっていくことが、これからの目指すべきカタチであろうか。地域の参加者に向けてより良い活動に調整していく傍ら、運営側も自己効力を感じながら楽しみとやりがいを見出していける社会貢献活動としてこれが定着していくと望ましい。地域貢献委員会は、その企画・運営の下支えとして、これからも検討を重ねていく思いである。

おわりに

以上のように、「まちの保健室」の4年目の活動の課題と戦略について、勉強会を通じて有意義な話し合いの場を持つことができた。このたびは、今回の結果について広く共有できればという思いとともに、現時点の活動記録として報告させていただくことにした。今後は、ますます多様な専門領域とのコラボレーションをしていくことで、色々なカタチの活動が生み出されると良いと考える。「地域」と「健康」をキーワードに、これからも可能性の広がる「まちの保健室」であって欲しい。当委員会は、今後とも「まちの保健室」活動の継続を支えながら、さらにより良いカタチへ発展していくことを期待している。

最後に、日頃の運営への惜しみない協力や、勉強会に参加して下さった皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。

〔2018年度 地域貢献委員会〕

田中響・美船智代・高田美子・稲田千明・永見純子・藤原美智子・景山真理子・鈴立恭子・藤井麻帆・岡本朋子・松本弘美・田中美菜江・山根誠・宮本麻衣子・前田敦子（グローバルセンター）

注

- 1) SWOT分析:事業の内部環境と外部環境を、「強み」「弱み」「機会」「脅威」の4項目でチェックし、思考の整理と可視化を行うことで現状把握をするもの。これらの項目について、クロス表を用いて掛け合わせて戦略を導くものを「クロスSWOT分析」と言い、今回はその手法を用いて今後の戦略を検討した。
- 2) 「まめんなかえ師範」:鳥取看護大学が行う地域の健康づくりリーダー育成講座「まめんなかえ師範塾」を修了した市民ボランティアであり、「まちの保健室」を共に運営する地域活動の担い手である。「まめんなかえ」とは、鳥取県中部地域の方言で、人々が互いに「元気にやっていますか?」と気遣い合う時に交わされる言葉である。

- 3) 「まちの保健室」の活動類型:本学内で毎月1回開催(第3水曜日の午後)しているものを「拠点型」、倉吉市内の地区公民館(13地区)で毎年不定期的に開催しているものを「準拠点型」、行政や団体、自治組織などからの要請に応じて、公民館等で開催するものを「出前型」、健康フェアや地域の祭りなどのイベントに出展するものを「イベント型」と呼び、活動形態を分類している。

参考文献

- 1) 地域貢献委員会「「まちの保健室」SWOT分析から見えてきた今後の課題」、『平成30年度「地域貢献活動」報告書 地域との関係を紡いだ4年間の総括と未来図』,鳥取看護大学,2019, pp. 33-36.